



がどうだより

吟道賀堂流総本部 会報
第5号 令和5年5月1日
発行 吟道賀堂流総本部
会長 磯部賀堂

賀堂流第60回流碑祭

春分の日の3月21日、小雨降る生憎の天気の中、当番会である近畿本部赤穂・備州吟詠会のお世話で流碑祭の準備が滞りなくなされ、姫路護国神社本殿及び本殿前にてご遺族と会員 116 名が参列し、午前11時式典が開始された。石井副会長の先導で会詩合吟が奉納され、神事が始まる。肥塚理事長の先導で遺族代表の山下様が功労物故者 4 名の銘板を安置堂に奉安。昨年度の吟士権者である米山賀秀琳さんが献吟、引き続き神事後、本庄副会長の閉会の辞で終了。



奉安物故者名 黒田賀耿(近畿東播)、小林賀清風(京都長岡京)、山下賀久峰(近畿賀峰)、位田賀幸勝(近畿白陽)
(流碑管理委員会)

役員総会/参議会

桜の蕾もふくらみ始めた3月21日、流碑祭後に姫路護国神社社会館で開催した。コロナ禍での代表者による総会から3年ぶりに役員全員(中国本部5名、京都本部6名を含む 44名)が顔を会わす総会となった。令和4年度の事業報告・会計報告の後、令和5年度の事業計画・予算案が承認された。より多くの人に参加できるように、賀堂流吟士権者決定大会開催要綱が一部改正され、出吟資格が、第一部では入会から奥伝まで、第四部の五人合吟競吟は、男女混合でのチーム編成も可能とした。また、令和6年には吟道賀堂流創流90周年記念大会・祝賀会が12月1日(日)アクリエひめじで開催予定。総本部理事長に、野町賀少副理事長が就任した。



(事務局/総務局)

吟道賀堂流の歴史(5)

姫路朗吟会(田村賀峰会長)は昭和42年に西播詩吟会(段賀聖会長、昭和33年結成)、市川吟詠会(内藤賀峽会長、昭和39年結成)と共に姫路本部を結成し、昭和47年に近畿総本部と改称した。



牧賀交師

京都府福知山では、牧(服部)賀公師(昭和19年愛連二部吟士権者)が戦後帰郷して指導を始め、昭和40年に福知山吟詠会を結成。昭和41年には京都府詩吟連盟に加盟し、昭和45年に賀堂流京都吟詠会と発展的に改称した。一方、漢詩の造詣が深い千坂賀秀師(著述「勤皇詩選」等でGHQにより公職追放された)は退職後に姫路から長岡京に転居して市の漢詩講座を開講、昭和47年に長岡京吟詠会を創立した。昭和54年には両吟詠会により京都総本部(牧賀公会長、千坂賀秀副会長)が創設された。中国本部の桧垣賀陽師は愛連副理事長、広島県吟詠連盟理事長を歴任し、昭和43年に財団日本吟剣詩舞振興会が発足すると、中国地区連協議長、吟詠教本刊行委員、常任理事として活躍した。福山市に転居した姫路網干支部の十川賀昌師が昭和36年に福山吟詠会を設立し、十川師逝去後の平成8年に中国本部傘下になった。



千坂賀秀師

昭和60年吟瀟社発行の「吟詠の系譜」で“現代吟詠を築いた人びと”として32名の列伝が吟詠カセットテープ付きで掲載されており、賀堂流からは流祖磯部賀堂、田村賀峰、桧垣賀陽の3師が紹介されている。

(磯部賀堂)

吟と健康(5) 若々しい脳つくりのために

日々の練習に、大会出場の吟を練磨することは勿論大切ですが、一日一吟(新しい吟)に向き合ってみてはどうでしょうか! 賀堂流の吟題は六百首余りあり、毎日取り組んでも一年半で終える事はできない数です。

その詩の時代背景や作者検索など探求することで、想像力が広がり脳が新しい刺激を受け、より活性化します。さらに、徐々に譜節の理解や音階がつけられるようになり、自分自身が成長していることに気づくことができます。これらのことが大きな力になり、自信にもつながるでしょう(*。*)



(村山賀聖蓉)

総本部新役員紹介

理事長 野町賀少	事業部長 山端賀鶏
	
近畿本部 相談役	近畿本部 副会長 兵庫県連 理事

創流 90 周年記念大会

来年(令和6年)には賀堂流創流 90 周年を迎え、記念大会と祝賀懇親会を行います。

多くの会員の皆様!!
参加をお願いします。

日時: 令和6年12月1日(日)(予定)
場所: アクリエひめじ



近畿本部

ビデオによる昇格認定審査

毎年春と秋に、初伝以上の資格昇格に向けての審査会として、地方資格認定会を実施しています。会員の中には県外在住の人もおり、また高齢化の会員も増えているため、平成25年に初伝、中伝、奥伝の地方資格認定会の審査方法に関して、次のような特例が設けられ、運用されています。「地方資格認定会の規定に特例を設け、受審者が近畿本部から遠距離の地に居住している場合、または身体的に障害を持っている方、あるいは本部会長が特に必要と認める方については、実技をテープまたはCDに録音して審査を受けることができる。」

しかし、テープによる音声だけでは、吟じている人の顔も態度も全く分からないため、昨年の幹部会で、テープ審査(音声審査)に代えてビデオ審査を行うことが決定され、本年4月9日に開催された春季地方資格認定会で、県外在住の3名の初伝受審者のビデオ審査が実施されました。テープ審査と比べ、顔も態度もよく分かり、審査員からも好評でした。

実技審査の特例は、地方資格認定会の申請時に遠隔地特例の申請を行い、本部会長の承認を得た上で、ビデオ撮影は指導者が行き、不要な部分はカットして、SNS(ライン)で本部事務局宛に送るようにしています。現在は、スマホで簡単に動画が撮影でき、SNS(ライン)で送ることができますので、そんなに難しくはありません。コロナ禍によりリモート会議が普及しました。詩吟の指導においても足が悪くて教室まで行けない人も、スマホなどを使って動画で対話しながら吟の練習を楽しむことができるようになれば良いと思います。(片岡賀弘蒼)



中国本部

「令和5年度新春詠い初め&舞い初め大会」開催

毎年、恒例の「賀久清吟詠会」と「玉翠流翠月支部」主催の「新春詠い初め&舞い初め大会」は、1月21日に開催する予定であったが、コロナ陽性者(5名)が続出し、やむなく延期。幸い大事に至らず、全員元気に3月4日、広島安芸区民文化センターにおいて、盛会裏に開催する事が出来た。

弊会は、藤河会長をはじめ勝矢翠月を師匠とする「玉翠流翠月支部」の舞者(11名)を擁し、毎年、新春を祝う華麗なる「吟舞」を楽しんでいる。

藤河会長の三つのモットーである「朗詠・作詩・詩舞」の神髄をこよなく探求している。



舞の「地吟者」に指名されると、責任ある朗詠が期待されるので、稽古に力が入り上達の秘訣でもある。今年は、吟が17組・舞が15組・合計32組のプログラムを編成。コロナ禍の中、会員の意欲も旺盛で、稽古不足を感じさせない「新春梅の節句」を飾る優雅な大会となった。藤河会長のトリを飾るに相応しい自作「米寿すぎ・・・」の和歌が朗詠されると、拍手が一段と高くなり、若さと気品・気迫がはじける思い出の記念大会に幕が降りた。(宅重賀清輝)



京都本

「第1回 会員による定期発表会」を開催

京都本部長岡京吟詠会では会員を対象にした事業として、「吟剣詩舞大会」、「吟士権大会」、「一般研修会」、「定期発表会(年2回)」を開催しています。

しかし、ここ2年間はコロナ禍で中止になる事業が多々あり、発表や研修する機会がほとんどありませんでしたが、ようやく活動出来るようになり、今年最初の事業として、去る3月19日第1回目の定期発表会を50名の参加者のもと実施することが出来ました。

定期発表会は、従来「月例研修会」と言う名称で、発表者に対して指導者によるワンポイント講評を行う形で長年実施して来ましたが、気軽に発表したいと言う要望や短時間でのワンポイント講評では吟詠力の向上効果があまり期待出来ないなどの理由から、新たに発表を主体に変革した事業です。

「定期発表会」では、会員が好きな漢詩、和歌、剣詩舞など気軽に自由に参加できます。一方、吟詠力向上に対する施策の要望もあり、今回は発表者の中から2名の方に一人20分程度の特別吟詠指導を高橋賀秀正副会長、横山賀秀邦副会長 2名の指導で実施しました。(長岡京吟詠会)

